只見短歌会　五月詠草

大塚栄一　指導

田植ゑ終へ一斉に蛙鳴く夕べ夫はテレビの音を高くす　古川　英子

節句には菖蒲や蓬軒に差し風呂に入れたる習はし廃る　渡部ゆき子

集落の民泊に来し学童の肉焼く匂ひ風にのりくる　馬場　八智

今年また赤翡翠の声を聞く移らふ時の区切りのやうに　小倉キミ子

縫ひぐるみ抱きその父に甘えゐし母入院の孫は寝入りぬ　新国由紀子

鷺三羽飛びゆきし後抜かれたる苗代目立ち風に吹かるる　関谷登美子

野菜畑の草を素手にて取りし指頁めくるに感触うすし　目黒　富子

夏冬の衣類の整理に時かけて取り組みをれどいまだ進まず　渡部ヨリ子

「道ありき」読み終へ見上ぐ出窓より物語りめく月が耀ふ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月例会

目黒十一　指導

フェルメール青目のあたり聖五月　順子

雨晴れて不意の高さの朴の花　信

深緑や村の旅行の顔と顔　修一

夏めくや神社の木陰抹茶飲む　都

食卓は夏の緑で賑いり　一穂

梅雨が来て漸く野菜伸びにけり　味代子

只見湖に麦の秋風波しずか　吉児

園児らの雀がくれに戯れり　礼

眠られぬ蛙の合唱夜もすがら

新緑に汽笛響かせ只見線

自転車はそのまま倒し春嵐

花曇りランドセル背にピアノ弾く

空家にも帰郷知らせる燕かな

雷鳴や大雨呼んで畑潤む

風のごとく一人神楽の来る五月

雪渓を水面に田子倉湖の五月